

継続的な共創表現活動でのファシリテーションの変容

Transformation of Facilitation in Continuous Co-creative Expression Activity

○ 西 洋子（東洋英和女学院大学） 三輪敬之（早稲田大学）

Hiroko NISHI, Toyo Eiwa University

Yoshiyuki MIWA, Waseda University

Abstract: The presenters have been holding workshops of “hand-contact improvisation” which is a co-creative expression using one’s own body in the affected area (Ishinomaki City and Higashi-Matsuyama City in Miyagi Prefecture) of the Great East Japan Earthquake for three and a half years. In this study, review on existence and transformation of facilitation on continuous co-creative expression activity was made based on the visual record of every workshop and two interview researches conducted with four care providers participating in the workshop. In conclusion, it was confirmed that the program design of the workshop itself was co-created by a wealth of participants. Additionally, in “hand-contact improvisation in circle”, the participants began facilitating expressions mutually as the activity continued, and “co-creative facilitation” emerged in the site of the workshop.

Key Words: Co-creative Expression, Workshop, Hand-contact Improvisation, Facilitation

1. 研究の背景

西は、身体での共創表現の実践の中核に「身心の共振」を据えて、精神科入院病棟でのダンス療法（1995-2006）やコミュニティでのインクルーシブな身体表現活動（1998-現在）等を実施し、多様な身心が出会い、つながり合いながら、新たな表現の創出を目指すワークショップ（以下WS）を展開している。こうした実践現場では、身体的共創のミニマムモデルとして、活動者相互が手をあわせ、身体の能動と受動を同時にやり取りしながら、各々が主体的に、かつ、共に表現を創り合う「てあわせ表現」を多く行っている。これまで西は、てあわせ表現を軸に、工学や計量経済学、臨床心理学分野と協働し、統計的手法による共振の発現過程のモデル化を手がけ、三輪らは、一軸手合わせ表現装置を開発し、共創表現の創出的ダイナミクスの解明等に取り組んできた。これらを踏まえ、てあわせ表現では、身心の共振によって他者との関係性の深化が連続する5つのモードから構成されるという知見を、モーションキャプチャーによる結果と関連づけて発見している。

一方、西と三輪らは、東日本大震災を契機に「身体的共創から社会的共創へ」を掲げ、2011年の9月から月に1度の割合で宮城県内を廻り、被災地訪問と1年間のパイロットスタディとしての小規模なてあわせ表現WSを実施した。その結果、特に言語の未成熟な幼児や言葉のない重度発達障害の子どもたちは、被災経験とその後の生活環境の大きな変化に適応できず、困惑した状態が続いており、こうした子どもの家族や現地の教育・福祉関係者もまた、援助者であり続ける緊張状態が長期化して、自己の自然な感情の表現を過度に抑制する傾向が顕著であることをつかんだ。そこで、2012年の12月から月に1度の割合で、現地の障害のある子どもと家族、教育・福祉関係者、一般市民が参加するてあわせ表現WSを開始し、現地の方々との協働を築きながら、3年半の活動を継続・拡充している。

以上のような背景の下、西らは第1回WS（2012.12.09）から第8回WS（2013.10.13）の映像記録とインタビュー記録を個人や場面ごとに分類・整理して、「共振の深化」を示すモード間の移行が特徴的であった事例を抽出・検討する研究を行った⁽¹⁾。これらにより、多様性を包摂する共創表現では、差異のある自己と他者との身体的関係性が、モード間の水平移行とモード内の垂直深化の双方で変容し、活

動者の身心がひらかれていく事実を、社会的実践の現場で初めて捉えることができた。この結果は、身体からはじまる原初的な関係性の変容が、表現を介して身心の関係性をも拡大・深化させ、共存在感や居場所感を伴う社会的関係性の構築へと向かう可能性を強く示唆するものである。

2. 研究目的と方法

本研究では、毎回のWSの映像記録と、3年半のWSに継続参加している4名の保護者と支援者（Sub.A,B,C,D）を対象に行った2回のインタビュー調査（第1回調査：2014年3-5月、第2回調査：2015年12月）の逐語録を対象に、てあわせ表現を主活動とする、被災地での継続的な共創表現活動でのファシリテーションの実際とその変容を検討することで、社会的な実践現場における「共創するファシリテーション」の在り方を見出すことを目的とする。なお、本研究が収集・記録するデータは、音声・画像（動画・静止画を含む）、及び、アンケート調査による個別情報等多岐にわたる。したがって、本研究の実施に当たっては、対象者の人権及び尊厳を重視し、個人情報の保護に留意するため、収集される全ての情報に対して早稲田大学倫理審査委員会による以下の審査・承認を得ている。

・アンケート調査・半構造化面接による個別情報（研マネ第107号：申請番号2014-025）

・音声・画像情報（研マネ第188号：申請番号2014-068）

3. 結果および考察

3.1 てあわせ表現WSの実施状況と参加者の特性

2012年12月-2016年6月の3年半に実施したてあわせ表現WSは、東松島市ならびに石巻市を合わせて60回を超える（Fig.1）。毎回の参加者は、東松島WSが30-40名、石巻WSが20-30名ほどであった。このうち、2014年8月22日はイオンモール石巻で、2015年8月22日はせんだいメディアテークを会場に、公開・交流WS「てあわせでしあわせ」を開催し、各々100名以上の参加者を得た。

WS開始当初の参加者は、それまでの約1年間のパイロットスタディを通じて、現地で知り合った方々とその関係者であった。当時は、「みんなで一緒にからだを動かして表現しましょう」という大まかな活動内容が人づてに伝えられたのみで、特段の社会的位置づけや明確な広報活動は行っていなかった。震災から1年9月が経過してはいたが、石巻市や東松島市では、震災と津波の影響が生活全般にわたって続いており、現実的なモノの復興とは質の異なるこ

うした試みが，果たして現地で受け入れられるかどうかの予測もつかないまま，わずかなつながりを頼りにWSの定例化を試みる運びとなったのである。したがって初回時には，「知人に誘われるままに，何を行うのかはよくわからないで参加した」という方や，「子どものあそびの活動だと聞いていたので，付き添いのつもりで参加した」という保護者が殆どを占めていた。以降の3年半，本WSは，教育や療育・療法，コミュニティづくり等に何らかのかたちで寄与しているとは考えられるが，そのどれをも直接的な目的として掲げることなく，てあわせ表現による身体での共創表現のみを参加者相互で共有，確認しながら進んでいる。



Fig. 1 Workshop of “hand-contact improvisation expression” in the disaster affected area

3.2 「わけない」現場にファシリテートされるプログラムデザイン

Fig.2は，WSの現場において，回の経過に伴い，自然にかたちづくられてきたWSの流れである。本WSでは，こうしたプログラムデザインそのものが，多様な参加者の相互作用によって，実践の場で徐々に形成されてきた点に大きな特徴があるといえる。

一般的なWSにおけるプログラムデザインは，WSの企画・主催者がその責任の下に事前に定めるものと位置づけられている。その際には，「目的やねらいを明確にし，それを実現する手段を吟味し，どういう人がどういう気持ちで参加するのか，対象者の心理や特性もよく理解しておく必要がある」⁽²⁾とされる。一方で，本WSの実施に際して，企画・主催者間で事前に確認していたのは，集まった人が一緒にてあわせ表現を行うという活動内容のみであり，これさえも，先述の通り，全ての参加者に周知されていたわけではなかった。



Fig. 2 Program design of the workshop

さらに，毎回のWSに，どのような参加者が何人参加するかは常に不確定であり，WS中の出入りも，特別の制限はなく参加者自身に任されている。

実際，本WSに参加する人々は，乳幼児から高齢者までの年齢幅があり，発達障害や肢体不自由等の障害の有無や種別，被

災の経験やその程度等については，特に尋ねることも尋ねられることもなく，また，表現に参加する人や周囲で見学する人の区別なく，会場に足を運ぶ全ての人が，WS参加者として相互に承認されている。

このように，集う人を「わけない」立場にたつことは，参加者それぞれにとってのWSの意味が，それぞれの個の内側から立ち現われるのを待つという姿勢を，WSに関わる人々にファシリテートする。したがって，プログラムデザインは，それぞれの思いがWSでの表現を介して相互に編まれ，WS全体の雰囲気が醸成されることで，具体的にかたちづくられたのである。WS開始から3年半を経た現在においても，本WSのプログラムデザインは，その時々

の雰囲気を反映しながら，流動的に変容していると言える。このような「わけない」現場にファシリテートされるプログラムデザインのひとつの特徴は，本WSの「はじまり」の部分に顕著に現れていると捉えられる。Fig.3は，第1回WSから第5回WSの前半60分の活動内容を示したものである。一般的なWSの「はじまり」の部分では，WSの目的の意識化や目的の共有が図られ，主催者によって準備されたアイスブレイクなどが行われる。本WSにおいても，Fig.3に示すように，第1回および第2回には，主催者の挨拶（Fig.3：青）からWSがスタートしているが，第3回以降では，言語による一方的な活動が姿を消し，その代わりに会場に到着した人から順次てあわせをはじめるという双方向的な活動が出現し（Fig.3：濃紫），第5回WSでは，この「自由なてあわせ」からWSがはじまっている。こうした変容が生じた理由として，1か月振りに再会する人々は，回を重ねることで自然に手をあわせて挨拶を交わすようになり，そのままてあわせをしながら近況を報告し合う状況が発生したことが挙げられる。映像記録からは，こうした「はじまり」によって，本WSに参加する重度自閉症等の言葉のない参加者や対人回避傾向の強い参加者が，特に躊躇なく自ずと自由なてあわせに加わる様子が頻りに確認される。一方で，WSに初めて訪れた参加者は，当たり前のようにてあわせをはじめるといった人々の様子を眺めながら，WSの雰囲気を直感的に掴み，自分なりの関与の仕方を見出していく。また，ファシリテータにとっては，これまでのWSで十分なかかわりがもてなかった参加者を誘い，ゆっくりとてあわせを試みる時間が確保されることとなる。共創にとって重要な出会いの場面が，ここでは，誰に取っても負いなく進行し，いつの間にかWSがはじまっていくのである。「てあわせ表現」というシンプルな活動内容を継続することで現場からファシリテートされたこのプログラムデザインの「はじまり」の部分は，本WS全体の雰囲気を象徴しており，WSの重要な要素として現在でも維持されている。

WS.No Date/month/year	activity contents											
No5(2013/6/9)	hand-contact improvisation: moving freely	moving on the floor	pair work	hand-contact improvisation in circle	moving on the floor	pair work	break	hand-contact improvisation in circle	moving on the floor	pair work	break	hand-contact improvisation in circle
No4(2013/4/28)	sitting	hand-contact improvisation: moving freely	pair work	hand-contact improvisation in circle	moving on the floor	pair work	break	hand-contact improvisation in circle	moving on the floor	pair work	break	hand-contact improvisation in circle
No3(2013/3/20)	moving individually	moving on the floor	hand-contact improvisation: moving freely	hand-contact improvisation in circle	moving on the floor	pair work	break	hand-contact improvisation in circle	moving on the floor	pair work	break	hand-contact improvisation in circle
No2(2013/2/11)	lying	moving on the floor	moving individually	hand-contact improvisation in circle	moving on the floor	pair work	break	hand-contact improvisation in circle	moving on the floor	pair work	break	hand-contact improvisation in circle
No1(2012/12/9)	moving individually	moving individually	hand-contact improvisation in circle	moving on the floor	pair work	moving on the floor	break	hand-contact improvisation in circle	moving on the floor	pair work	break	hand-contact improvisation in circle
duration (minutes)	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10

Fig. 3 Transformation of the program design (#1 to #5, initial 60 minutes)

3.3 「サークルでのてあわせ」におけるファシリテーションの変容

3.3.1 相互受動的な関係性を超えて

本WSで行うてあわせ表現は，3.2で示したような参加者相互による「自由なてあわせ」場面（Fig.3：濃紫）と，全

員がフロアー全体に大きな輪になって座り、輪の内側で一人の参加者とファシリテータ、あるいは二人の参加者があわせを行い、他の人はその表現を見る「サークルでのあわせ」場面 (Fig.3: 赤紫) に大別される。

一般的な WS において輪になって座るといふ形態は、「課題や問いという中心 ("中つ火") から等距離で、つまり一人ひとりが対等でそれぞれが尊重される平たい場」⁽²⁾ の象徴的表現として重視され多く用いられる。中野は WS での学び方のエッセンスを突き詰めたところには、「輪になって座る」と「深く聴く」があると述べ、さらに、輪の中央には、トーキング・スティックという木の棒がおかれて、棒をもっている人だけが話し、持っていない人は聴くというシンプルなルールが重要になることを説明している。このトーキング・スティックは「途中の介入を控え、お互いを深く聴き合う」⁽²⁾ ことで場を深めるはたらきを担うとされる。WS では、自分自身を見つめ直すために、まずは、ありのままの自己を表現し受容されるという、信頼と受容の場の生成が極めて重要である。WS という日常とは離れた時空間において、多くの見知らぬ他者を前にすると、さまざまな思いや意図がはたらき、ありのままの自己を言葉で表現することは極めて困難であることが想像される。トーキング・スティックは、一般的な WS における言葉での自己表現をファシリテートする実践手法のひとつであり、象徴的事物であると言えるであろう。

一方で、本 WS においては、身体での共創表現のトーキング・スティック的はたらきを担うものとして、ファシリテータ自身の身体があげられる。Table 1 は、4名のインタビュー対象者が、「サークルでのあわせ」場面で、ファシリテータである著者 (西) と初めてあわせ表現を行ったときの自身の思いを語っている箇所を抜粋したものである。対象者は、初めての「サークルでのあわせ」場面において、「最初、引っ張ってくださっている感じ」(Sub.B)、「もう、お任せ、お任せってうか」(Sub.C) のように、自己を極めて受動的な立場として感受していることが特徴的である。しかしながらその感覚は、消極的な受動というよりもむしろ、全てをファシリテータ任せにすることで気楽さや心地よさが生まれ、極めて自然に動きが進行することが「無意識」や「赤ちゃんのような」新鮮な体験として語られているのである。他方、ファシリテータの立場からすると、初めての参加者とのあわせ表現において、ファシリテータ側が一方的な能動性を発揮し表現をリードするとは考えにくい。ファシリテータは、こうした場面において、個々の参加者の内側に生じる感覚こそが、WS にそれぞれの意味を与え、今後の WS や共創へと向かう気持ちに深く作用することを経験的に十分理解している。したがって、より丁寧に相手の動きを受け取り、さらには、受動や能動、(ファシリテート) する/されるといった二項関係を超えて、創り合う表現世界の中で響き合い、共に遊ぶかのように新たな表現が生まれるよう、自身の身心をかけて精一杯にてあわせ表現を試みるのである。映像記録からは、サークルを取り囲む参加者は、このような相互に受動的な関係性を超えようとする共創表現を、時に真剣な、時にあたたかなまなざしで見つめている様子が観察される。一般的な WS において、トーキング・スティックがファシリテートする言葉を「深く聴く」ことは、人の話だけでなく、自分の無意識の声、自然界の声なき声をも含むとされている。本 WS においても、意識的な相互受動的関係性を超えて、二者の身心相互が共創する表現には、個の意図から開放されたその人らしさや存在そのものが自然に溢れ、周囲の人々

は、同様の場面での自身の感覚をも重ねながら、それぞれの存在とその在り様を、身心で「深く感じ」ているのではないだろうか。これこそが、「サークルでのあわせ」の場がファシリテートする、身体での共創表現の大切な気づきのひとつであると言える。

3.3.2 共創するファシリテーションのめばえ

さらに現場では、WS を重ねることで、上記の気づきの感覚が少しずつ磨かれ、2年半が経過した 2015 年 7 月の WS では、「サークルでのあわせ」場面において、参加者相互に表現をファシリテートし合う状況が生まれ、それが参加者によって明確に意識化されるまでに表現の場が変容したのである。Table 2 は、Sub.B がその際の様子を、初回時(2013 年 2 月)と対照的に語ったものである。初回時の「サークルでのあわせ」場面では、ファシリテータ任せから生まれる表現を介して、「そのままいいんだ」と自己の存在が受容される感覚について述べているが、2年半後には、参加者すべてが相互にファシリテートし合う状況が生じ

「それぞれの気持ちの中にファシリテータがいる」と語り、「あの瞬間は、ああ、素晴らしいなと思いました」と、積極的に意味づけている。継続的な身体での共創表現の社会的実践において、「共創するファシリテーション」のめばえが強く感受される貴重な事例であると言える。

Table 1 Feedback on “hand-contact improvisation in circle” gained from the interview

subjects comments.No (year)	comments
A:120(2014)	私の動きをちゃんと、先を読んで、こう、うまーく、こう[うーん]、形をつくっていたように思いますね。
A:126(2014)	無意識までは行かないんですが、こう、あの一、自然とこう、自然に手が動いてたんですね[うーん、ねえ]。両者の手がこう。
B:032(2015)	こう合わせた段階で、こう、こう大切に、こう大事にしてくださいとか、こう、何、うん。
B:036(2015)	あの一、こう自由に[うん]出していいよって、たぶん言ってくさっているんだと思うんですけど、まあそれができないので、先生が、こう[うん]、最初引っ張ってくださっている感じに、が、押し込まれるみたいな。
C:005(2015)	もう何か、N先生とやっているときは、もう、お任せ、お任せってうか、何か、N先生がどうしたいのかなという感じですかね(笑)
C:019(2014)	あのときは、何かねえ、もう、そうですね、気持ち良かったですね。何か、でも、すっかり任せて。
D:109(2014)	先生の手に、自分の手が合わせて、こう、何、震えてるとうか(笑)。すっごい、何ですかね、赤ちゃんみたいですね。何か、こう、はい。初めてのときに、ぶるぶるなるとうか、のは覚えてます。あとは何だかわかんないうちに、こう、わかんないとうか。
D:115(2014)	こう、動かされているときは、何か、結構、何ていうんだろう、気楽っていうんではないんですね。何ていうんですかね、自然のまま、結構あんまり考えなくても。何か、やっぱ、自然に動けるんですけど。

Table 2 Transformation of facilitation in the scene of “hand-contact improvisation in circle”

The way the workshops were held in February 2013	the way the workshops were held in July 2015
B:049(2015)：呼ばれて、こう、先生につれて行かれて[はい]、そこで表現してくださいって、こう言われて、もう[うん]。もともとそういうのは苦手な人間なんです。まず、まず、うん、だめな人なんですけども、それをやっている自分がまずすごいと思いましたね。それで、そこに、こう、連れていかれても[うん]、あの、大丈夫なんだよという、その[うん]、大、大丈夫なんだよというか、そのままいいんだよという、何、自分でやり、自分もやりたいんですね。そしてね、何か、うん、何かそういうのがこう感じられる。感じられてきたんですけど。	B:235(2015)：自然に、こうセンターに行って、ダンス、「あわせ」をし始めたんですよ。 B:236：だから、円座になっているほうが少ない感じになってきて[うん、なるほど、なるほど]、見ているほうが、みんな踊り出している感じ。 B:237：あれは、ああいうのがいいなと思う、思いました。 B:239：あれは、こう、やっぱりそれぞれの気持ちの中に、こう、ファシリテータがいる、いたんですけどね。こう。 B:240：ええ、そういうところで、こう、ひとごとじゃなくて、何だろう、何、自分でやり、自分もやりたいんですね。そしてね、何か、うん、何かそういうのがこう感じられる。感じられてきたんですけど。

参考文献

- (1) 西洋子, 三輪敬之, 被災地での共創表現と共振の深化—このフィールドは何を問いかけているのか—, アートミーツケア, Vol.7, pp1-18, 2016.
- (2) 中野民夫, ワークショップ—新しい学びと創造の場—, 岩波書店, 2001.

本研究は、JSPS 科研費 JP25282187, JP15K12636 の助成を受けたものです。